脱原発から、その先へ

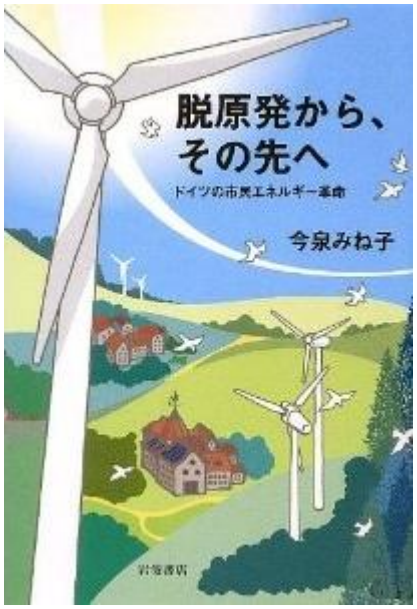
ドイツの市民エネルギー革命

著：今泉みね子

本書は福島の原発事故後に**「エネルギー転換」**実現への道を踏み出したドイツのエネルギー政策とその背景、転換を実現するためのさまざまな具体例、およびそれにともなう障害や問題を紹介している。全四章から構成されており、各章では、原発事故以前から事故後のドイツの様々な政策や法決定、活発に活動する市民団体、再生可能エネルギー法とそれにより生じる課題、多様な再生可能エネルギーの事例などについて述べられている。内容は幅広く、比較的簡潔にまとまっている。脱原発についてドイツの例を参考に学ぼうとする際には、良き教科書にもなりうるだろう。

どういった根拠のもとで原子力発電が導入されたのか。化石燃料消費の拡大や電力不足が懸念されるために脱原発は不可能である、という論拠は正しいのか?再生可能エネルギーは本当に高価なのか？脱原発に向かうにあたり我々市民はどのように行動すべきなのか？
―こういった疑問を抱える方に、この本は新たな視点を提供するだろう。

例えば「エコ電力は高い！」という意見に対する著者の考えはまったく逆である。ドイツにおいて再生可能エネルギーには、今後の技術力促進などのため【賦課金制度】が導入されている。対してドイツで発電の割合の多くを占める石炭・褐炭発電には、補助金が支給されている。原子力発電には加えて事故や核廃棄物の処理コストがかかる。これらを我々が支払わなければならない時、いったいどれだけの金が必要になるのか。本当に「再生可能エネルギー電力は高価」だろうか。本書内では実際の数字に基づいた詳しい計算がなされている。
―この問いの答えはぜひあなた自身に確かめていただきたい―



本書を通じて筆者が伝えたかった一番のことは「**日本でもエネルギー革命は実現できる**」ということである。本書に書かれたようなドイツのさまざまな活動例から、我々は多くのことを学ぶことができるだろう。太陽光発電を広く普及させる。地域で発電し地域で消費することで、無駄を省こうとする地産地消のエネルギー社会を構想する。これらの活動を世界に先駆けて行い、環境大国の名に恥じぬように市民が一丸となり国を力強く動かしてきた。そんなドイツでの単なる脱原発にとどまらない「その先」のエネルギー転換についてわかりやすく学べる図書こそ、本書である。

<目次＞

第１章 フクシマがドイツを変えた―エネルギー転換への道
第２章 環境大国ドイツの底力―エネルギー転換の背景
第３章 エネルギー転換をささえる制度と技術、そして問題
第４章 カギは市民参加!―地域分散型供給へ

＜書籍情報＞
著：今泉みね子
出版社：岩波書店
発売日：２０１３年３月１６日

演習（日独社会研究２）
紹介者：T．Y